

華麗なるハプスブルク帝国——その永遠の光芒（二）

皇帝カール六世と国事詔書

富山典彦

ヨーゼフ一世の弟カール六世は、一六八五年十月一日にウィーンで生まれた。一六七八年生まれの兄とは九歳も年が離れていた。カールが生まれたとき、兄はもう、帝国の後継者としての地位を固めていた。長子単独相続ではないとはいえ、次男のカールには、スペイン王を継ぐことしかなく、また、そう予定されていた。当然のことながら、母親は、この次男により大きな愛情を注いだ。

スペインと言えば、イエズス会。カールは、イエズス会士を家庭教師として教育された。だから、兄とは違って、「ハプスブルク家の伝統」に忠実、つまり、女性に対して軽い浮気心などもっていなかった。音楽は、オルガン奏者

で宮廷楽長のヨーハン・ヨゼフ・フックスの指導を受けた。

そして、スペイン王カルロス二世が一七〇〇年十一月一日に逝去して、スペイン系ハプスブルク家の血は絶えてしまふ。カルロス二世は、スペイン王のほかに、ナポリとシチリアの王位も持っていた。さて、この王位を誰が継ぐことになるか。

一七〇三年九月十九日、いよいよスペイン行きの日が来てしまった。このときカールは、十八歳の誕生日を目前に控えていた。だからまだ結婚もしていない。「民に奉仕するための犠牲」とまで言われてのスペイン行きだった。母

親に愛されて育った息子とその母との別れは、さぞかし辛かっただろう。

一七〇六年七月二日にはスペイン王に選出され、カルロス二世のあとを受けて、カルロス三世となる。カルロス三世は、このときまだ独身だった。また、スペイン王に選出されたとはいいながら、いまだスペイン継承戦争が決着したわけではなかった。

そんななか、一七〇八年八月一日、カルロス三世はバルセロナで結婚する。結婚相手はブラウンシュヴァイク＝ヴオルフェンビッテル公女エリーザベト＝クリステイーネであった。もういぶん以前に、ドイツ諸侯はカトリックとおもにルター派のプロテスタントに分かれていたが、彼女はもちろんプロテスタントだった。カトリックのハプスブルク家の大公と結婚するために、一七〇七年五月一日、バンベルクの大聖堂でマインツ大司教によって、カトリックの洗礼を受けていた。

ハプスブルク家とはなにかと敵対してきたフランスのブルボン家だが、スペイン王位をめぐる、対立は先鋭化している。この当時、すでにヨーロッパにおける国際社会は確立されていて、いくつもの国家がそれぞれの立場と利権によ

り、同盟してみたり、戦争してみたり、そして、和議を結んでみたりと、その複雑な国際関係の推移に追いつくことは容易ではない。

スペイン継承戦争そのものをここで詳細に述べることはやめて、「若い宮廷」のリーダーであったプリンツ・オイゲンの「暗躍」に焦点を絞ってみよう。ウィーンの宮廷前の英雄広場に建っている二人の騎馬像の一人が、どちらかといえばフランスの属国であるサヴォアから来たオイゲンである。彼は、ハプスブルク帝国をトルコから救ったばかりか、ウィーンからはるか東のベオグラードをトルコから解放したことで有名である。

さて、その「暗躍」だが、プリンツ・オイゲンはまず、宿敵フランスとの妥協の道を探る。ヨーゼフ一世の死後、誰が神聖ローマ皇帝になるべきか。この皇帝は、七人の選帝侯による選挙で選ばれるのが原則だ。ただ、ハプスブルク家はこれまで、皇帝の目の黒いうちに、息子をローマ＝ドイツ王に選ばせておき、皇帝の死んだあと、その王が皇帝になるというシステムを作り上げ、事実上皇帝位を世襲化してきた。レオポルト一世の長男ヨーゼフ一世は、このシステムに則って少年のときにすでに王になっていたが、

その次がなかった。

次の皇帝には誰がなるのか。プリンツ・オイゲンは、その有力な候補になるであろうプロイセン王をなんとしても阻止しなくてはならなかった。神聖ローマ皇帝はもともと、ローマ＝カトリックの世界の長だから、プロテスタントの皇帝など、いかななものか、ということ、カトリックの君主であるフランス王との妥協の道を探る。もともとパリの宮廷に出入りしていたオイゲンのことだから、この道はそれほど困難なものではなかったかもしれない。

しかし一方で、イングランドのマルボロ公との強い絆があったものの、ハプスブルク家がスペイン王に加えて神聖ローマ皇帝までも手にすることへの恐怖が生まれ、一七二二年のオイゲンとイングランド女王アンナとの交渉の失敗により、「大連合」は瓦解した。

ハプスブルク家はスペインを諦め、そのかわり神聖ローマ皇帝を確保する。スペイン王としては、ブルボン家からフェリペ五世が正式に承認されるが、そのかわりフランスとスペインとの同盟は禁じられる。スペイン領ネーデルラントはオーストリア領になり、さらにミラノとナポリがハプスブルク家の領土となる。サヴォア公はシチリア王を獲

得し、大ブリテン王国には、ジブラルタル、アメリカのニューファンドランドとニュースコットランドが与えられた。フランスは、孫をスペイン王にした見返りとして、新たな領土の獲得はない。まあこのような取り決めが、一七一三年四月十一日に締結された。世界史の授業で習ったユトレヒトの和約である。

皇帝はこの和約を拒否し、レーゲンスブルクの帝国議会も戦争継続を決定するが、その裏には、ハプスブルク家にとって緊急の課題があった。ウィーン郊外にあるファヴォリータ城で、四月十九日に秘密会議が行われ、*Pragmatische Sanktion*、かの有名な「国事詔書」が発布されたのである。皇帝カール六世は、なんとしてでもこの詔書を帝国諸侯のみならず、ヨーロッパの各王侯に認めてもらう必要があった。

それまでどちらかといえば分割相続をしていたハプスブルク家だったが、この詔書には、今後は長子単独相続にするということが定められていた。この時点ではまだマリア＝テレジアも誕生していないし、長男レオポルトも生まれていなかったが、万が一のために、この「長子」が男性でも女性でもいい、ということになっていた。しかも、カー

ル六世の兄ヨーゼフ一世には二人の娘がいたが、かりにカール六世に男児が恵まれなかったとしても、カール六世の娘にこの二人のプリンセスよりも優先権が認められていた。

つまり、ハプスブルク家の家領が、この先ずっと、カール六世の子孫に一体のものとして受け継がれていくことになったのである。これから先カール六世は、この国事詔書を承認してもらうためにひたすら奔走する。

その手始めは、宿敵フランスとの和解である。一七一四年三月六日から七日にかけて、ラシユタットでハプスブルク家とブルボン家との和平条約が締結される。これによって、ハプスブルク家はライン川右岸を最終的に放棄し、帝国内諸侯のヴェイッテルスバッハ家は本来のバイエルンとケルンの選帝侯位を取り戻す。そのかわりハプスブルク家はスペイン領ネーデルラントとイタリア半島にあるスペインの領土を獲得し、イタリアでの主導権を手に入れる。

続いて、九月七日には、フランス王国と神聖ローマ帝国との和議が成立するが、緊張関係はなおも持続する。スペイン王フェリペ五世は、ハプスブルク家の皇帝カール六世を認めようとせず、ハプスブルク家に譲り渡されたイタリア

アにおけるスペインの領土の回復をはかろうとする。さらに、今や大ブリテン王国となったイングランドの支援が受けられなかったため、スペイン領ネーデルラントを所有することができない。帝国内諸侯のなかでは、プロイセンとザクセンの独立志向が強くなり、皇帝にはもはや手の施しようのない有様であった。

そんななか、イングランドの女王アンナが逝去し、フランスの「太陽王」ルイ十四世が引退する。空席となったイングランド王には、ハノーファー選帝侯ゲオルクがジョージ一世として戴冠する。しばらくの安息、かと思いきや、またまたトルコが不穏な動きをする。

トルコはまず、ベネチア領のペロポネソスを占領する。そこでプリンツ・オイゲンの進言により、ローマ教皇に支持されて、皇帝カール六世とベネチアとの同盟が成立する。一七一六年四月十三日のことである。

その後、進軍してきたトルコ軍を、プリンツ・オイゲンに率いられた七万人の皇帝軍が迎え撃ち、八月五日、皇帝軍は大勝利を勝ち取る。その余勢を駆って、バナートを占領し、ボスニアを超えてワラキアまで軍を進める。時のローマ教皇クレメンス十一世はプリンツ・オイゲンに、宝

石とダイヤモンドで飾られた剣と帽子を与える。

ローマ教皇からこのような格別の激励を受けて、一七一七年六月半ばには、プリンツ・オイゲンの率いる皇帝軍はベオグラードの北東に進撃する。もちろんトルコ軍もここは死守すべきであり、七月三十日には援軍が駆けつけるが、皇帝軍は八月十六日、ベオグラードの要塞に突撃し、十八日には市内に侵入し、なんと、四倍の敵に勝利する。

こうして、一七一八年七月二十一日にはパッサロヴィッツの和平条約が結ばれ、ベオグラードはドイツ人の都市になる。このドイツ人を「ドナウ・シュヴァーベン人」などと呼ぶことになるが、しかし、もともとこの地域に多く住んでいたセルビア人は、都市に住むことが許されず、郊外に排除されてしまう。遠い将来に、セルビア人がハプスブルク家の皇位継承者フランツ・フェルディナント大公夫妻をサラエヴォで殺害することになるが、その種子はここに蒔かれていたのである。

これでもう、トルコの脅威は過去のものとなる。その最大の功労者プリンツ・オイゲンだが、戦いの天才は、武器なき戦いである外交戦略ではなにかと邪魔者扱いされたのか、怒ってウィーンから出て行ってしまふ。カール六世か

らすれば、もう戦いはやめにして、「国事詔書」を認めてもらい。ハプスブルク家の安泰を祈念しなくてはならない。

一七一六年四月十二日に、長男レオポルトが誕生しているが、その年の十一月四日には死去しており、男系が絶えてもハプスブルク家の家領を娘に単独相続させることを規定した「国事詔書」は、まさに預言の書ということになる。その翌年一七一七年五月十三日には長女マリア・テレジアが誕生し、一七一八年九月十四日に次女マリア・アンナが誕生する。待望の男の子はまだ生まれぬ。

三女マリア・アマリアが生まれたのはそれからしばらくあと、一九二四年四月五日のことだから、次女と三女の間のこの空白が何を意味するのか。愛妻家カール六世は、最後にもう一度、男の子が生まれるかどうか、賭けてみたに違いない。その結果はまた女の子。ここでついに「国事詔書」の緊急性が高まってきたのである。

カール六世夫妻と三人の娘たちを描いた、一七三〇年の絵が残っている。その年の四月十九日に、三女マリア・アマリアが死去してしまうので、この五人家族の絵にはどことなく悲しみの表情があるのは、それを予期していたの

か、あるいは、この絵が三女の死のあとに描かれたものなのか、いろいろと想像させるものがある。

その間に、ヨーロッパの国際情勢は複雑怪奇に変転を繰り返している。一例を挙げれば、一七一八年八月二日の大ブリテンとフランスとの同盟がある。これによって、ハプスブルク家は最終的にスペインを諦めるが、そのかわり、シチリアを獲得する。その一方で、カール六世の兄ヨーゼフ一世の二人の娘の夫たちは、自分たちの妻の相続放棄を認めようとしなない。オーストリア継承戦争は、この時点ですでに予定されていたといえよう。

さらに、これまであまり国際関係に登場したことのないロシアが表舞台に登場し、フランスに接近する。その一方で、ブルボン家出身のスペイン王フェリペ五世は、スペイン王位をめぐる戦ったカール六世と、一七二五年四月三十日に同盟を結ぶ。ジブラルタルをスペインに認める代わりに、パルマとピアツェンツァとトスカナは神聖ローマ帝国領となり、同時にスペインは「国事詔書」を承認する。この動きに呼応して、ロシアもプロイセンもザクセンもバイエルンのヴィッテルスバッハ家も、「国事詔書」を認める。

こうして、一七二七年の時点で、ヨーロッパは二つの同盟に分かれることになる。ひとつは、大ブリテンとフランスとオランダとスウェーデンとデンマークとノルウェーで、もうひとつはハプスブルク帝国とロシアとスペインとプロイセンとザクセンとバイエルンである。

一七四〇年にカール六世が死んだあと、認められていたはずの「国事詔書」を反故にして、オーストリア継承戦争が起るが、その相手がプロイセンとバイエルンとザクセンだったから、やはりこの同盟も当てにならない。条約とは破棄するために締結するものである、と言えそうである。

そんななか、一七三三年二月一日、ポーランド王アウグストゥス三世が逝去する。この王は、ポーランド王とザクセン選帝侯を兼ねていたから、スペイン継承戦争とは違って、ポーランド継承戦争は跡継ぎがいらないから起こった戦争ではない。彼には、フリードリヒ・アウグストという歴史とした息子がいて、その息子は先の皇帝ヨーゼフ一世の長女マリア・ヨゼファと一七一九年に結婚している。

この相続に横やりを入れてきたのは、フランス王ルイ十五世であった。自分の義父スタニスラフ・レクツィンス

キーを、ポーランドの議会でポーランド王に選出させたのである。ザクセン選帝侯を継いだフリードリヒIIアウグストは、妻の相続を放棄することで、オーストリアとロシアの支持を得て、その圧力によってレクツィンスキーを追放し、ポーランド議会に自らを王として認めさせたのである。

これに対してフランスが宣戦布告して、ポーランド継承戦争が始まる。フランスの狙いは、実はアルザス・ロレーヌと並び称されるロレーヌ、ドイツ語で言うところのトリンゲンだったと考えられる。ロートリンゲン公フランツIIシユテファンこそ、マリアIIテレジアがその愛を捧げた生涯ただ一人の男性だったからである。この二人の結婚が実現した暁には、オーストリアとロートリンゲンが統合され、アルザスまでが風前の灯火となるであろう。

先代皇帝ヨーゼフ一世の次女の嫁ぎ先であるバイエルンのヴィッテルスバッハ家は、同盟から離れてフランス側につくが、その狙いはもう、ここで言うまでもないだろう。この戦争の結果、一七三八年十一月十八日にウィーンの和平条約が結ばれ、ザクセン選帝侯が正式にポーランド王アウグストゥス三世となり、レクツィンスキーは「名誉ポー

ランド王」の称号を得る。

フランスの巧妙さは、そのあとだ。メデイチ家の消滅により空白となったトスカナを、ロートリンゲン公が手に入れ、そのかわり、ロートリンゲンを「名誉ポーランド王」に譲る。そしてその死後、ロートリンゲン、いやロレーヌは、その娘婿のフランス王ルイ十五世の手に落ちる。アルザスとロレーヌがともにフランス領となった瞬間である。

そのかわり、ハプスブルク家の宿敵フランスは、ついに「国事詔書」を承認する。もはや息子が生まれる可能性がなくなったカール六世としては、何が何でも「国事詔書」であった。「若き宮廷」の頭領だったプリンツ・オイゲンも、老いからも死からも逃れられず、一七三六年四月二十一日に死去する。

彼の遺言は、「国事詔書」によりハプスブルク家の全家長を独占的に相続するはずのマリアIIテレジアの結婚相手についてであった。マリアIIテレジアの結婚相手をめぐってはいろいろ取りざたされていたが、プリンツ・オイゲンは、バイエルン選帝侯の息子を最適の相手とした。国際情勢を考えたときには、なるほど、さすが英雄の判断だと頷ける。

しかし、その少し前、同じ年の二月十二日に、マリアⅡテレジアは最愛の人とすでに結婚していた。プリントツ・オイゲンの遺言に従っていれば、もしかしたらオーストリア継承戦争は起こらなかったかもしれない、などと想像するのは歴史認識の甘さだろうか。

ウィーンを中心にあるシュテファン大聖堂のなかにあるクロイツ礼拝堂に、ハプスブルク家とは本来無関係だったプリントツ・オイゲンは埋葬されている。この大聖堂前の広場からウィーンの見抜き通りのケルントナー・シュトラッセを歩いて行くと、カール広場に出るが、ここにはバロック様式の優雅なカール教会が建っている。「国事詔書」にハプスブルク家の安泰を賭けた皇帝カール六世の祈りが、この教会に結集している。

この皇帝の性格は、慎重すぎて決断力に欠けるとされているが、その反面、せっかくとルコをはるか東に封じ込めていたにもかかわらず、プリントツ・オイゲンの死後、無用の戦いを挑んで、獲得していた領土を失ってしまう。それでも、兄の時代から継統していた内政改革には力を尽くした。そして何よりも、「国事詔書」により、ハプスブルク家の家領の統一をはかった。

一七四〇年十月二十日、ハンガリーとの国境にあるノイジードラー湖に狩猟に行った帰り、体調を壊して急死した。長女マリアⅡテレジアは、そのとき妊娠六ヶ月だったために、父の死の床に行くことはできなかった。この子どもこそ、ハプスブルク家の明日を託された、後の皇帝ヨーゼフ二世である。

(つづく)

本稿は、「成城学びの森」二〇一五年秋季冬講座で話した内容を文章にまとめたものである。これまでこの講座でさまざまな話をしてきたが、それらを文章としてまとめていく予定であり、その手始めとして、最近の話題を拾ってみた。参考文献その他は、この「華麗なるハプスブルク帝国 その永遠の光芒」がもう少し本格的に書き進められた段階で、順次提示していくつもりである。